

娯楽のための狩猟／密猟とされる狩猟

何百万円も支払い、何千キロも移動して、娯楽のために狩猟をしにくるハンターと、密猟の罪で逮捕されることに常におびえながら生活のために狩猟をおこなう地域住民。「南北の経済格差」と一般的に表現すれば、このような対比は実感に欠けてしまう。しかし、両親とともにフランスから訪れていた子どもがキャンプでも本国とほとんど変わらない食事をしていることを観察したわずか 1 時間後、バイクで村に戻り、村でそのフランス人と年の近い子どもが残飯を兄弟とともに食べているのを見たとき、私はいいようもない感

情に襲われた。「豊かな生き方とは物質文明など生活水準だけで推し量れるものではない」という意見があり、私もそれに賛同するが、この絶対的な格差とは何なのか。研究を続ける私からこの問いが離れることはないだろう。

引用文献

- Eastman, G. 1927. *Chronicle of an African Trip*. New York: John P. Smith Company.
Lindsey, P. A., P. A. Roulet and S. S. Romanache. 2007. Economic and Conservation Significance of Trophy Hunting Industry in Sub-Saharan Africa, *Biological Conservation* 134: 455-469.

伐り残された木

—タンザニアの農村におけるムブラの木と人々の関わり—

山 本 佳 奈*

タンザニア南部のボジ高原は、かつてマメ科ジャケツイバラ亜科の樹木を主要な構成種とする疎開林（ミオンボ林）に覆われていたが、20 世紀初め、この地にコーヒーがもたらされると、ミオンボ林はまたたく間に開墾されてコーヒー園に変えられていった。今では私が調査している村でも天然林はほとんど姿を消し、季節湿地に囲まれたアップランドにはトウモロコシ畑とコーヒー園が広がっている。そのような景観のなかで、唯一伐られずに残されてきた木がある（写真 1）。現地

のニイハの人たちがムブラ（*mbula*, 学名：*Parinari curatellifolia*）と呼ぶクリソバラヌス科（*Chrysobalanaceae*）の常緑樹がそれである。ムブラはミオンボ林の構成樹種のひとつではあるが、ミオンボ林以外の植生にも広く分布し、タンザニア全土でみることができる。ここでは、ニイハの人々とムブラとの関わりについて紹介する。

乾季の 8～9 月になるとムブラの実（ウルブラ：*ulubula*）が熟す。子どもたちは地面に落ちた果実を頬張りながら、高木の枝に

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 畑の中に残されているムブラの木

たわわにみのった果実に小枝を投げつけて落とす。ムブラの実には長径3~4センチメートル、短径が2センチメートルほどの、グミの実を少し大きくしたような形をしていて、赤茶色に熟した果肉は甘酸っぱく、ミオンボ林でとれるもっともおいしい野生の果物のひとつである。果実を臼と杵でついて果肉（イカンビ：ikambi）と種子（ウルスンブ：ulusumbu）にわけ、種子を取り出してから果肉に水を加え、さらに杵でついて絞ると甘い液体がとれる。この甘い汁を、昔はよく砂糖の代わりに粥にいれて食べていた。また、種子は石や斧で割って、中の仁（ウルニョニョ：ulunyonyo）をとりだす。それは見た目も味もピーナッツに似ていて、私も子どもに種子の殻を割ってもらって味見してみたが、油脂に富んだ濃厚な味がしてとてもおいしい。ただ殻が非常に硬く割るのに骨が折れるので、子どもたちもときどき食べる程度であるが、昔は仁を煎ってそのまま食べたり、つぶしたものをインゲンマメの葉にあえたりして頻繁に利用していたようである。また、干ばつのときには非常に重要な食料とな

るなど、ムブラはニイハの人々の間で大切にされてきたのである。

ボジ高原のあるムベヤ州ボジ県の村で調査をはじめた当初から、ムブラだけが伐り残されているのは気になっていた。上述した食料としての重要性によるものと考えていたが、かなりの数のムブラが畑の中にも残されている。この地域では古くから牛耕が盛んで、牛は乾季に刈り跡放牧される。常緑のムブラは牛たちに貴重な休息場所を提供している。また、林が減って薪不足が常態化しているこの地域では、道沿いに植えられたユーカリの再生枝やトウモロコシの穂軸、そしてムブラの木によじ登って切り落とした枝が燃料として使われている。しかし、枝を切り落とすのであれば、ミオンボの他の樹種でもよく、ムブラだけを選択的に残す理由にはならない。畑の中にムブラが残っている理由を村人に尋ねてみると「他の木は作物の生育を妨げるけれど、この木は邪魔しないんだよ」という答えが返ってくる。「邪魔にならない」というだけでムブラだけが伐られないとは考えにくかったが、当時はまだムブラが残されている理由をどのように調べていけばよいのかわからず、そのまま放置せざるを得なかった。

ところが、最近、別の調査からムブラがニイハの儀礼のなかで重要な役割を果たしていることを知った。現在、調査地の住民の大半はキリスト教徒であり、祖霊信仰に基づく儀礼を積極的におこなっている人はそれほど多くないが、私はその儀礼や慣習のなかにニイハの自然観を見出せないだろうかと考え、それについて古老に尋ねていた。そして、その

調査のなかでムブラの話がでてきたのである。

かつてニイハはンコマンジラ (*nkomanjila*) という焼畑農業を営んでいて、毎年近くの林を開墾してンコマンジラを造成し、畑が家から遠く離れると家屋を移動させていた。一方、家族のだれかが死ねば遺体を敷地内に埋葬し、そこは故人の霊が宿る場所（墓）となる。引越しのたびに墓も移動させるが、そのときにムブラの枝が使われる。ムブラの枝を折り、その枝を手にもって墓の地面に触れる。そして、その枝を新たに墓にしようとする場所へ運ぶのだが、枝をもって移動している間はだれとも言葉を交わしてはならない。枝を置いたところが新しい墓の場所になる。こうして亡骸そのものは移動させることなしに墓を移動させることができるのである。また、故郷から遠く離れた場所で家族が死に、そこに亡骸を埋葬せざるを得なかった場合にも、この方法で故人の霊を家族の墓に移せるのだという。ある墓にシロアリが巣をつくってしまったときも、2 メートルほど離れたマメ科の大木のそばにムブラの枝を使って墓を移動させた。

この地域では 20 世紀初めからキリスト教の布教が盛んにおこなわれ、今では住民の大半がキリスト教徒で、毎週日曜日にはおしゃれをして教会に出かけて神に祈りを捧げ、家族の幸福を願う。一方、天候不順や病気に関しては、その原因が祖霊や悪霊の仕業だと考えられていて、その場合は教会ではなく呪術師のところへ行く。たとえば、家族のだれかが原因不明の病気にかかったときなど、まず呪術師のところに行って病因を調べてもら

う。それが祖霊の怒りによると診断されたなら、その怒りを鎮めるために墓の前で家畜を犠牲にしたり、墓に酒を供えたりする。日常生活で起こるさまざまなトラブルに対して、彼らは頻繁に祖霊と交信する必要があり、その対象となる墓を身近に置いておかねばならないのである。

また、ニイハには 12 人のチーフがいて、それぞれの領土をもっている。とはいっても、今ではチーフが政治的な権力をもつわけではない。彼らは特別な呪力をもつとされていて、呪術にまつわるもめ事の調停や儀礼の取り仕切りなどをおこなうことが多い。チーフの墓には円形の小さな家のような造形物が建てられる（写真 2）。この造形物はインサハ (*insaha*) と呼ばれ、その一部にもムブラが使われている。インサハには主要な柱が 4 本あり、太陽が昇る方角の柱にはムラマ

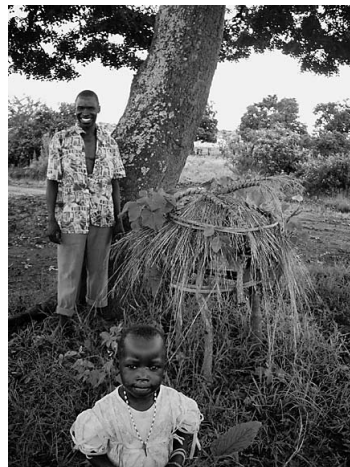


写真 2 チーフの墓に建てられる小さな家のような造形物

この造形物の太陽が沈む方角の柱にムブラの枝が使われている。

(*mlama*, 学名: *Combretum molle*) が使われるが、太陽が沈む方角の柱にムブラの枝が使われている。その他の柱には特定の樹種を使うと決まっているわけではない。

こうした儀礼にムブラの枝だけが使われるわけではなく、生きている立木そのものが祖霊の宿る場所として、墓と同様にムブラの株元に祖霊への供物を供えることがある。この場合も、病気や災害の原因となっている祖霊の怒りを鎮めるために、酒や家畜を供えるが、ムブラにはより日常的な小さな願い事（たとえば、狩りの成功を願うなど）をする際にも用いられる。また、墓とムブラの株元の違いは、墓が埋葬されているひとりの霊を対象にしているが、ムブラの場合は複数の祖霊を対象にしている点である。移住を繰り返すなかで、ムブラの枝を使って多くの祖霊がムブラの株元に累積された結果なのであろう。

ある日、知り合いのお婆さんの家を訪ねたとき、ムブラの株元に酒を供える話になった。彼女は畑に生えているムブラに酒を供えて祖霊を供養する習慣をもっていた。彼女にお願いして、どのように酒を供えるかをデモンストレーションしてみせてもらうことにした。本来ならムブラに供える酒はシコクビエの醸造酒にかぎられるが、このときは水で代用してもらった。

お婆さんは上半分が棒状で下半分が大きく膨らんだヒョウタンを2つ持ち出してきた(写真3)。ひとつは下半の側面のちょうど真ん中あたりに穴が開けられていて、もうひとつは上半と下半の境目あたりに穴が開けられている。それぞれ、ウルピンディ (*ulupindi*)

とフィンガ (*finga*) という名前がある。どちらも同じ形状のヒョウタンで、見た目には穴が開いている場所が違うだけだが、ウルピンディは柄杓として日常的な用途にも用いられる道具であるのに対し、フィンガは祖霊に酒を供えるときのみ用いられる儀礼用具である。

お婆さんはウルピンディで水(酒)をすくって、その一部をフィンガに注いだ。そのときのお婆さんは、しゃがんだ体勢で、左手を左足の下から通してフィンガを支えていた(写真3)。これが酒を供物にするときの姿勢なのだという。そして、ウルピンディとフィンガの両方をもって家の前の畑に行き、まず家屋から一番近くに生えているムブラの下で、「シロンデ(彼女の夫のクラン名)よ、このお酒をみんなで飲んでください。子どもたちと一緒に」と言いながら、ウルピンディに入っていた水(酒)を木の株元にまいた。

その後で、そこから数メートル離れたところ



写真3 ヒョウタンに供物の酒を注ぐ

ろにある，前のムブラよりも大きく，根元から5つに株立ちした立派なムブラ（写真4）のところに行き，その株元にウルピンディとフィンガを置いた（写真5）．一本目のムブラで酒をまいたのは，祖霊に対する「お招き」であり，二本目のムブラに酒を供えたのは，たくさんの祖霊たちがそこにやってきて，おしゃべりしながら酒を飲んでもらうためだという．酒は次の日までそこに置かれ，その後家族みんなで飲む．このお婆さんの畑には，この二本のほかにもムブラが残っていたが，それらは儀礼に用いられることはないという．

もうひとり，同じようにムブラに酒を供えるのをみせてくれた男性がいた．彼はチーフと同じクランに属している．そのムブラは，彼の甥のコーヒー園の中にあつた（写真6）．そこは彼の父親が生前暮らしていた屋敷跡で，父の墓もそのすぐ近くにあつた．ムブラのすぐそばには，別の樹種の木が二本生えて

いて，そのうち一本は根元から二股にわかれていた．毎年乾季の半ばにこれらの幹を柱としてインサハのような建造物をつくるのだという．亡き父，母，そしてふたりのオバへの供物として，木の株元にシコクビエの粉で4つの小さな山をつくり，その上にシコクビエの醸造酒をたらして，「お酒を差し上げまし

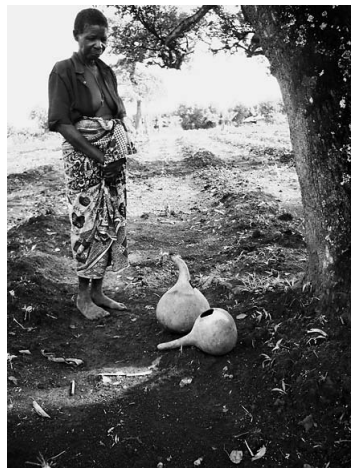


写真5 祖霊が集まるムブラの根元に酒を供える



写真4 祖霊が集まってしゃべるムブラ



写真6 コーヒー園の中のムブラ
この古老はムブラの根元に祖霊に供物を捧げる。

た。みんなで一緒に飲んでください」と唱えるのだそうだ。

ほかにもふたりから、大木の株元に酒を供える話を聞くことができた。いずれの話しても、酒を供える木はムブラであった。しかし、かつてはムブラではなく、この地域にたくさん生えていたミオンボの樹種が主に用いられていたという話も聞いた。ミオンボ林が伐り開かれてゆく過程で、食料や乾季の日陰、薪など、多目的に利用できるムブラが伐り残され、いつしか聖なる木として利用されるようになってきたのかもしれない。

現在、畑に残されているムブラのほとんどは、薪用に毎年枝が切り落とされるが、酒を供えるムブラだけは枝が切られることはなく、枝が大きく張り出して、葉が茂って、畑に濃い陰をつくっている。残されているムブラのうち、こうした樹形の木は少なく、儀礼に使われているものはほんの一部にすぎないことがわかるが、他の樹種木の伐られ方と比較し

てみても、ニイハはムブラを幹から伐り倒すことに何らかの抵抗をもっていることは間違いない。たとえ今は使われていなくても、かつて祖霊の宿る木として扱われていたという記憶が伐採を斟酌させている可能性もある。いずれにせよ、祖霊信仰をもつ人々にとって、ムブラは祖霊と現世をつなぐ特別な木であり、大切に守られてきたのは確かである。

私が調査している村の周辺では、林がほとんど伐られてしまい、在来の木の名前や特性を熟知している人も多くない。そのため、調査地に一部残された林を調べるのにも苦労した。また、多くの子どもたちは、果実のなる木の名前は知っていても、それ以外の木には関心がなく、失われてゆく在来の知識を憂うこともあった。しかし、今回、畑にムブラが残されている理由を追いかけるなかでニイハとムブラとの多様な関係に触れ、開発がすすむ社会のなかで顕在化してきた人と木の深甚な関わりをかいまみることができた。

ビエンチャン市民の生活にみるピーマイ・ラオ（ラオス正月）

森 一 代*

4月上旬のラオスの空は綿あめのような雲が青い空によく映える。洗濯物を干しながら吸いこむ朝の空気はまだひんやりとしていて、小学生の頃の夏休みの朝を思い出す。

今年のラオス正月（ピーマイ・ラオ）は4

月14日から16日までの3日間。とはいえ、お正月モードはそのすこし前から始まっている。地方へ帰るひとや、旧首都であるルアンパバーンで新年を迎えるひとは、バスの混雑を避け早めに帰省を開始する。南部方面のバ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科